

ケニアスタディーツアーを終えて
京都大学工学部地球工学科国際コース 2 回生
石井達規

私は今、土木工学を大学で専攻し勉強している。将来は発展途上国において、出来るだけ直接的な形で人々の生活水準の向上に貢献したいと思っている。もっと端的に言えば、大袈裟ながら、幸福を享受する人を世界中でもっと増やしたいのである。この思いは、とある発展途上国において劣悪な環境で働き詰めている人々の姿を目の前に強い違和感を覚えた私自身の経験に基づいている。しかし、文字にすれば簡単に聞こえるものの、そもそも幸福、特に生活環境が日本とは大きく異なる発展途上国における人々の幸福とはどんなものなのか、実際に足を運び、彼らと時間を過ごすことを通して少しでも理解したいと思った。加えて、土木工学を学ぶ学生として純粋に、住民たちが自分たちの手で道の状態を直していくプロセスとその影響に非常に興味があった。これら二点が私のスタディーツアー参加の動機であった。

今回私が出会ったケニア人達の大半は、経済的には中級階流かそれ以上に分類されるような人達で、自分自身の将来及び国の将来に対する期待を語ってくれた。私達がエルドレットでのホームステイでお世話になった、FIST というユースグループの 20~30 代くらいの若者達もこの階級に分類される。彼らの活動は、若者の就職支援、道直しやゴミ拾いなどのコミュニティの生活環境改善である。この道直しには、道普請人から教わった土嚢を使った方法を用いている。こうした活動の内容だけでも、称賛に値するが、彼らのグループにはさらに一つ特筆すべき点がある。それは、このグループは、社会において払拭しきれていない、他民族を排斥するような意識を全くもっていないということである。こうした彼らの活動や民族に対する意識に触れ、思うことは、彼らは自分達の進むべき将来をしっかりと見据えているのだということである。彼らの言葉や表情そして行動は、自分の生活だけでなく、コミュニティさらには国全体をよくするのだという情熱と自負心の大きさを物語っていた。

一方で、ナイロビでは、経済的に恵まれない人達の生活を目にすることがあった。路上で物乞いしてくる、まだ幼く体つきも小さい子ども達。狭い土地に密集した簡易住居に住むスラムの住民達。彼らの生活の実態は、私自身とのそれとは全く異なる。そんなことは現地に行かなくても知っていた、言わば「知識」であった。しかしながら、特に私が過ごしたようには幼少期を過ごせない、子ども達を目の前にし、「現実」として手に取って見てみると、強く感じたことがあった。やはり彼らが、生活において不安から解放され、エルドレットの若者達がそうであったように、将来に期待を持てて初めて、幸福を享受できるのだと。この将来への期待とは言い換えれば、自分自身への自信であり、これは他人に依存し続ける状態では決して得られないものである。よって、道普請人のように彼らの自立を促す役割が非常に重要なのである。これが私がこのスタディーツアーで得た一番大きな

ことかもしれない。

大学の机上の勉強では、日々課されるものをこなすのに精一杯で、目標を見失ってしまったこともあった。しかし、このスタディーツアーを通じて、自分が大学で学ぶ意味を再認識した。やはり私は、将来土木技術者として、人々の幸福の実現に寄与したいのである。土木工学を学ぶ者としての自負心と、またこのスタディーツアーで得たことを活かさなければならないという責任感を持って、自分の目的実現に向け、日々精進する覚悟をここに得た。

